



Japan Society of
Youth and Adolescent Psychology

Newsletter

第 78 号 2019 年 7 月 17 日
発行：日本青年心理学会事務局

■目次

<第 27 回大会委員長挨拶>

小沢一仁：日本青年心理学会第 27 回大会のご挨拶…………… 1

<特集：青年心理学者が国際交流を進めるには―国際ワークショップを通して>

侯 玥江：国際ワークショップで学んだ社会科学者としての心構えと
スキルについて…………… 2

関森真澄：現代の青年の心を捉える感性を磨く「国際交流」という手段…………… 3

小塩真司：「楽しい」国際交流…………… 3

千島雄太：国際標準に則った研究を進める必要性…………… 4

平石賢二：ICP2016 と第 1 回国際ワークショップ，あれから 3 年
―初代国際交流委員長として…………… 5

<書評>

下村英雄：長尾 博（編著）ミネルヴァ書房（2017 年刊）
『多様化する「キャリア」をめぐる心理臨床からのアプローチ：
青年期から老年期までのケースに学ぶ』…………… 5

<書評：私のおすすめ，この 1 冊>

木谷智子：岩宮恵子（著）筑摩書房（2013 年刊）
『好きなものにはワケがある：宮崎アニメと思春期の心』…………… 6

<広報>

広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ…………… 6

事務局からのお知らせ…………… 7

<第 27 回大会委員長挨拶>

日本青年心理学会第 27 回大会のご挨拶

大会委員長 小沢一仁（東京工芸大学）

このたび日本青年心理学会第 27 回大会を 12 月 21 日（土）・22 日（日）に，東京工芸大学で開催させていただくことになりました。岐阜，滋賀，京都と大会が続いて参りましたが，久しぶりに，立教大学から 4 年ぶり関東圏での開催となります。

開催校の東京工芸大学中野キャンパスは，地下鉄／東京メトロ丸ノ内線および都営地下鉄大江戸線の中野坂上駅下車で，徒歩約 10 分です。中野坂上駅は，新宿から約 5 分で，羽田空港からは約 1 時間で着くことができ，都心の比較的便利なところです。

今大会では，招待講演として現象学者の竹田青嗣先生（大学院大学至善館教授・早稲田大学名誉教授）をお招きし，「フッサーと現象学的心理学」をテーマに講演をさせていただくこととなりました。青年心理学そして心理学という学問の基礎を，哲学の流れから根本的に考える機会となるものと思います。また，各委員会からは，研究委員会企画シンポジウム「青年期から成人期への移行の多様性」，国際交流委員会企画シンポジウム「研究を国際的に展開・発信する意義と課題：若者の社会移行を例に」，準備委員

会企画シンポジウム「青年心理学における出版のあり方を考える」が企画されており、内容的にも充実した大会となる予定です。

なお、今大会では、研究発表での活発な意見交換ができる工夫を検討しています。また、大会運営の負担削減に、参加費等の事前の振り込みをぜひお願いいたします。ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

開催時期が、年末となってしまいました。年末のお忙しい時期で恐縮ですが、多くの方々のご参加をお待ちしております。どうぞ宜しくお願いいたします。

＜特集＞ 青年心理学者が国際交流を進めるには—国際ワークショップを通して

青年心理学者が国際交流を進めるには、どのような取組みが考えられるでしょうか。立場や年齢、研究テーマによって異なると思いますが、ある具体的なエピソードを機に、アイデアが形となることがあるかもしれません。国際交流委員会では、ご自身の研究活動の幅を広げるために国際的活動について個人レベルで考えてみようという方や、既に国際的活動を進めている方、個人レベルに加えて多くの方をも巻き込む国際的活動を運営してみようという方に資する企画ができることを目標に活動しています。今回は、2018年7月に Dr. Worrell 氏をお招きして行った国際ワークショップの参加者の方や運営者にご執筆いただきました。会員の皆様にとっての国際的活動・国際交流に関わるご一考の機会となると幸いです。また、最後に初代国際交流委員長にもご執筆いただきました。今後の青年心理学会国際交流委員会の様々な取組みへのご協力をお願いいたします。

(担当：日本青年心理学会国際交流委員会)

国際ワークショップで学んだ社会科学者としての心構えとスキルについて

侯 玥江（北海道大学大学院 教育学院）

この度の日本青年心理学会 2018 年度国際ワークショップでは、カリフォルニア大学バークレー校の Worrell 先生のレクチャーを通し、テーマであった「英語での論文投稿」についての理解を深められました。レクチャーでは論文執筆に限らない基礎的な英語の書き方について学ぶことができましたが、私にとってより刺激的であったのはレクチャー後の質疑応答でした。英語で論文を生産するためには、時に戦略的・効率的な方略が有効であり、具体的には文章構造の枠組みに従って内容を代入していく手法を知ることができました。私自身は Worrell 先生の話聞いた後も、“社会科学者”として、効率的に論文を高 IF により多く掲載させることなく、学校生活の中で困難を抱えている子どものリアルな実態を科学的かつ丁寧に描き出す論文を執筆していきたいと考えています。しかし、これから先の長い研究者人生の中では論文執筆に悩みを抱えることもあると思います。その際にはまず 1 日 1 文ずつでも進めていくことが重要ですので、今回のワークショップでは参考にできるスキルを学べたと思いました。

また私は日本に留学している外国人ですので、もちろん文法構造や言語が持つ彩りには大きな違いがありますが、私にとって英語も日本語も同じ外国語です。私は日本における小中移行期の学校適応について研究していますので、研究成果の“社会”への還元を考えると日本語で発表すること、得られた知見を通し“科学”の発展に貢献するならば英語で成果を発表することが最善かと思います。そのため、この論文執筆スキルは英語に限らず日本語での論文執筆にも活かせると感じました。

これから学位論文や投稿論文を執筆する過程で壁に当たったときに、本ワークショップで得られた収穫を思い出して、立ち止まることなく執筆を続けたいと思いました。

現代の青年の心を捉える感性を磨く「国際交流」という手段

関森真澄（筑波大学大学院 人間総合科学研究科）

昨年、私は青年心理学会国際交流委員会企画の国際ワークショップに参加した。そこでは、時間的展望の最新研究紹介に加えて、英語論文の執筆・投稿に関するレクチャーやそれらに関する手厚い質疑応答もあり、多くのことを学ばせていただいた。私がこのワークショップに参加して考えたことは、「青年心理学こそ、国際交流の意義が最大限発揮されるに違いない」ということである。

私は、博士課程に進学したときに青年心理学の専攻になったが、それ以前は社会心理学を専攻していた。新参者である私が思う青年心理学の良さは「青年の心の様相が、研究によって精緻に彩りよく表現されていること」である。現実生きる青年の姿やその内面をストレートに取り上げ、それらの実態を心理学の研究によって明らかにする、青年の心そのものについて真正面から議論する研究観こそ、他の心理学領域にはない青年心理学独自の特徴であろう。

青年たちの複雑な心を研究するためには、先行研究や理論の整理はもちろんのこと、青年たちの心の様相を捉える鋭い感性が必要である。そして、その感性を鍛えるために重要なことは、心の機微を捉える様々な観点を知ることにあると私は考えている。そして、そこにこそ、海外の研究者たちと交流する意義を見出すことができる。日本とは異なる文化に生きる研究者と交流することで、「なるほど、この文化に生きる人々の心理の根底には、こういった観点があるのか」と、普段思いつかないような観点に気づくことができるのである。国際交流によって、現代を生きる青年の多様な心を捉える豊かな観点、ひいては鋭い感性が鍛えられるというわけだ。

現代はグローバル化が進み、情報社会が成熟し、以前にも増して青年たちの心は複雑化、多様化したといわれている。そのような現代において、国際交流は、単に海外の知見を知るのに役立つだけでなく、現代の青年たちの多様化した心を捉える大きな助けになるであろう。本稿が、みなさまの国際交流を進める動機づけを高めるきっかけになれば幸いである。

「楽しい」国際交流

小塩真司（早稲田大学文学学術院）

2018年7月29日に開催された、Worrell先生のワークショップに参加しました。前半は青年期における時間的展望について、特に国内でも海外でもよく使用されるZimbardoの尺度と対比しながら、青年期において時間的展望の持つ意味を理解することができました。また後半では、英語で論文を書く際のポイントをわかりやすく解説していただきました。いずれの講演の内容も、とても価値のあるものでした。ご準備を進められた委員の皆様に感謝申し上げます。

さて、このような学会における海外の研究者との関係も、研究者個人の関係性に依存することが非常に大きいのではないのでしょうか。研究者の誰かが海外の誰かとつながっており、そこから多くの関係がつながる様子を今までもいろいろな場所で見っていますが、そういったところでは偶然や縁のようなものを感じることがあります。

自分自身もこれまでに、いくつかの国の研究者たちと交流してきました。ただしそのきっかけは、あまり褒められたようなものではありません。院生時代から大学で働き始めて数年が経つ頃までは、ほとんど海外に向けて研究を発信しようとも思っていませんでしたし、海外の論文は読むものの海外の研究者と交流するきっかけもなく、海外の学会に参加することもなく、海の向こうの遠い世界のように考えていました。ところが様々な偶然が重なり、某学会で国際交流委員会が発足したときに、その委員長に任命されてしまったのです。そういった状況のなかで、なかば強いられるような形で、海外の研究者とやりとりをし、来日した研究者のホストをし、海外の学会で研究発表をするような状況に置かれてしまったのです。

きっかけはどのようなことであれ、現在も複数の海外の研究者たちとは交流が続いています。その中で、海外の研究者と交流する際のコツのようなものを感じることはあります。

まず、相手に自分の存在を知ってもらうことです。いちばん良いのは、自分の web サイトに海外向けの情報を掲載することです。海外の研究者が自分の名前を見て興味を持てば、必ずインターネットで検索します。そのときに自分の情報が出てくることはとても大切です。逆に、海外の研究者に興味を持つことも大切です。誰がどんな研究をしているのかを把握するのは。会話を交わしてからその場で見つからないように、ひそかにその研究者についてネットで検索をすることもあります。また、自分と交流することに価値を見出してもらうことも大切です。海外の研究者たちの中には、メールを出してもメリットがないと判断されると返事も返してくれない人がいます。それがどのようなことでも良いのです。日本でデータをとってくれそう、尺度を翻訳してくれそう、独自のアイデアがありそう、良い観点で議論ができそう、交流すれば論文になりそうといったように、何かのメリットを感じてもらおうと、関係を作りやすくなります。

そして一番大切なことは、そういう活動を「楽しい」と思えることです。海外の研究者との交流をもつことは、研究者にとっての義務ではありません。海外の学会に行っても、日本人研究者どうしで固まって日本語で発表しているだけならば、英語で発表することが苦痛なのであれば、業績書に海外の発表記録を追加したいだけならば、無理にそういうことをする必要はないと思います。たとえ英語が苦手であっても（私も本当に苦手です）、海外の研究者をリスペクトして、良い関係を築きたいという気持ちを持つことが大切ではないでしょうか。

国際標準に則った研究を進める必要性

千島雄太（京都大学こころの未来研究センター）

この度、私の共同研究者である Worrell 教授を招いて、国際ワークショップを開催した。海外の研究者を招待するのは初めての経験であったため、最初の発案には非常に勇気が要ったが、終わってみれば非常に有意義な経験だったと思っている。今回執筆の機会をいただいたため、ワークショップを含むこれまでの国際交流・在外研究を通じて感じた、国際標準に則った研究を進める必要性について書くことにする。

Worrell 教授とは、2012 年の国際時間的展望学会で知り合い、2014 年頃から青年期における時間態度の測定と発達に関して、共同研究を進めてきた。最初のきっかけは、私が Worrell 教授の研究グループの研究発表の際、日本のデータについて質問したことだった。その発表は 10 カ国以上のデータで、時間的態度に関する共通の尺度を用いて、文化的な共通性や相違点について考察するものであった。しかし、そこに日本のデータはなかった。今考えてみれば、それは特段おかしいことではないのだが、当時の私には日本が無視されているような気がして、悔しかったことを覚えている。

この日本のデータがないことへの悔しさが、私の国際交流の原点である。その後も現在に至るまでに、何度も「日本の研究の存在感のなさ」を痛感させられる機会があった。共同研究者に、日本語で書かれた論文は引用しないように指示されたこともあった。そのような経験をする度に、英語で発信することの必要性を強く感じた。私を含めて多くの日本の研究者にとって、英語で書き、英語で発表することは決して簡単なことではないが、国際的に見ればそれは大前提であることを認識すべきであると思う。

ただ、これは言語の違いに限った話ではない。日本の研究は、国際的に普及している方法論や慣習に則っていないことも多い。例えば、日本では日本語で独自に作成された尺度を使用することが多く、それを国際学会などの場で理解してもらうことは至難の技である。翻訳の問題などはあるにせよ、できるだけ国際的に普及している尺度を使用する方が、海外からの評価を得られやすいし、文化間の比較も可能になる。Worrell 教授との共同研究は、このことを強く感じさせてくれた。

以上が、ワークショップを含めこれまでの国際交流を経て考えたことである。私自身現在カナダに在住しているため、そのことが日本の研究への危機感に拍車をかけていることもあると思う。本稿が、国際的な視点から見たら自分の研究はどう見えるのか、日

本の研究が無視されたままでいいのか、これからの国際交流をどう進めていくべきか、などについて考えるきっかけとなれば幸いである。

ICP2016 と第 1 回国際ワークショップ、あれから 3 年 —初代国際交流委員長として

平石賢二（名古屋大学）

日本青年心理学会に国際交流委員会が設置されたのは 2013 年度からで、委員会が最初に実施した企画は、第 23 回大会（立教大学主催）での第 1 回シンポジウムであった。シンポジウムの詳細については、青年心理学研究第 28 巻第 2 号の記録を参照して頂きたいが、ここでは日本の青年心理学における国際交流の意義や、誰のための国際交流なのか、国際交流の国際とはどこなのか、研究者間交流のあり方といった重要な観点について本質的な議論を行うことができた。

しかし、元々、この委員会は白井利明先生が ICP2016（第 22 回国際心理学会議）の組織委員として選出され、また、杉村和美先生と中間玲子先生がプログラム委員として推薦されたところから端を発している。そして、日本青年心理学会が ICP2016 の講演者として、イタリアの青年研究者であるエリザベッタ・クロチェッティ氏（Dr. Elisabetta Crocetti, University of Bologna）を推薦したことにより、彼女の招聘と講演を成功させること、さらには ICP2016 企画とは別に、学会独自の企画として第 1 回国際ワークショップを開催することが国際交流委員会の最大のミッションになっていた。そして、国際交流委員会のメンバーだけでなく、多くの会員の努力によって、これらのイベントを成功裡に終えることができた。少々大袈裟な表現を許して頂けるなら、日本青年心理学会における国際交流元年とも呼びたいほど、この 2016 年の夏は大きな転換点になったのではないかと考えている。

第 1 回国際ワークショップは、その後、第 2 回（Dr. Willem Koops）、第 3 回（Dr. Frank C. Worrell）と続いている。また、クロチェッティ氏の講演内容は、青年心理学研究第 29 巻第 1 号に特別論文として寄稿、掲載されたが、このような新たな論文種別を生み出すことができたことも意義深い。さらに、これは一部の会員に限られるかもしれないが、2016 年度以降に開催された国際学会への参加を促すきっかけにもなっていたと思う。

最後に述べたいのは、日本青年心理学会の国際交流活動はまだ始まったばかりだということである。青年心理学研究における国際交流とは何かという本質的な議論もまだ十分だとは言えない。そして、何より大切なのはこの動き始めた活動を多くの会員が参加し、繋いでいき、長期的に持続させていくことではないだろうか。

<書評>

『多様化する「キャリア」をめぐる心理臨床からのアプローチ： 青年期から老年期までのケースに学ぶ』 長尾 博（編著）ミネルヴァ書房（2017 年刊）

下村英雄（労働政策研究・研修機構）

本書冒頭では、現在、キャリアカウンセリング研究の第一人者であるサビカスの言葉として、「臨床心理学を専攻する多くの者がキャリアについてあまり重視しないことは悲しいことである」が引用されている。このテーマはキャリア研究者にはよく知られており、古今東西、繰り返し語られてきた。

心理臨床がキャリア支援を軽んじる最大の理由は、ともかくもキャリア支援の専門性が低く見えることにある。

キャリア支援には、大学院まで進んで専門的に勉強をした人が少ない。むしろ、企業で人事をやった人間が、その企業経験だけを頼りに人の相談に乗る。そこに危うさを感じるが故

に、心理臨床では、キャリア支援を下に見て、支援の何たるか、カウンセリングの何たるかを教え諭そうとする。

それに対して、キャリア支援は反発を感じてきた訳でもない。キャリア支援の側では、大学院で心理臨床をきちんと学んだ臨床家を尊敬している。キャリアコンサルタントの集まりに呼ばれ、下にも置かぬ扱いで、気分良く臨床心理学を話した経験がある人は多いと思う。ただ、その背景には、難しい臨床心理学のことは先生方がやってくださると思うので、というキャリア支援の側の一步引いたスタンスがある。無論、それで良いのだと心理臨床の側では考える。

互いに納得ずくのヒエラルキーを前提に、波風の立たない交流が続けられるなか、やはり置き去りにされてきたのは、両者の間で思い悩む当のクライアントであっただろう。

この本の最大の特長は、キャリア支援と心理臨床の奇妙なすれ違いを埋めることに、類例がないほどに成功している点にある。印象的なのは、心理臨床とキャリア支援の見事なまでの連携を数多くの事例で次々と示す点である。本来、心理臨床とキャリア支援はこのように有機的に密着して行われるべきものだったのだ。

この本が、キャリア支援と心理臨床の真に有意義な交流の架け橋になることは、もはや間違いないことであろう。

<書評：私のおすすめ、この1冊>

『好きなものにはワケがある：宮崎アニメと思春期の心』 岩宮恵子（著） 筑摩書房（2013年刊）

木谷智子（エリザベト音楽大学）

思春期は、子どもから大人への移行期であり、様々な心の葛藤を経験する時期である。葛藤の多くは複雑で、言葉で説明できないものも多い。本書は、複雑な思春期のころの在り方を、多くの子どもたちが好む宮崎アニメ作品から分析したものである。

本書の中には『となりのトトロ』『千と千尋の神隠し』『もののけ姫』『ハウルの動く城』など、だれもが1度は見たことのある宮崎アニメ作品が取り上げられ、主人公の心理状態や印象深いシーンについて分析がなされている。

例えば、『千と千尋の神隠し』では、主人公の千尋の両親が、店にあった料理を勝手に食べ、豚になってしまうというシーンが登場するが、これは、思春期に生じる親への幻滅を描いていると著者は考える。今まで頼りにしていた親の汚い面や、自分勝手な面を見てしまうことは、思春期の子どもにとっては親が豚に見えてしまうほどの衝撃なのである。

著者である岩宮恵子氏は、相談室やスクールカウンセリングの場で臨床心理士として活躍されており、時には著者が実際に出会った子どもたちの事例と関連付けながら分析がなされている。そのため、読み手は、宮崎アニメの世界と、現実の世界を行ったり来たりしながら、思春期のころの在り方について様々な想像をめぐらすことが出来る。大人になってしまうと、思春期の時に感じた体験を思い出すことや、思春期の子どもをこのころを理解することは非常に困難である。本書は、思春期の体験を想像し、理解するためのヒントをくれる本である。また、本書は難しい心理学の用語を使うことはなく、読者に話しかけるような文体で書かれているため、中高生でも、すんなりと楽しみながら読むことができると思われる。大人はもちろんのこと、自分について悩む思春期の方々にもおすすめの一冊である。

<広報>

広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ

第 72 号より、会員の皆様から意見や要望を募るとともに、自由な投稿・寄稿を促すことにしたとアナウンスさせていただきました。投稿・寄稿ルールについて、再度簡単に説明させていただきます。

● 会員から募集するのは、以下の 5 つです。

① 特集テーマに取り上げて欲しいトピックス 「特集テーマ提案」

随時募集。過去の NL 記事を振り返りつつ、編集委員会で検討し決定します。

② 書評に取り上げて欲しい書籍 「書評推薦図書」

随時募集。原則として最新号発行 1 ヶ月前に集約し掲載します。

③ 書評執筆の希望 「書評執筆希望」

掲載書籍への書評執筆の希望者を、原則として最新号発行後 1 ヶ月間募集します。該当書籍をお持ちでない場合には献本いたします。

④ 次号の特集テーマに関する投稿の申し込み 「特集テーマ投稿希望」

特集テーマへの投稿希望者は、原則として最新号発行後 1 ヶ月間募集します。

⑤ 会員からの情報や意見の自由投稿 「投稿：会員から」

随時募集。投稿内容が本学会の NL の記事に相応しいかを編集委員会で検討し、掲載の可否を決めます。不掲載の場合は、投稿者に理由を開示します。

● 投稿・寄稿時には、必ず件名を「」内の通りとし、本文の最初にお名前と所属・連絡先メールアドレスをお書きください。

● 書評および特集テーマへの執筆候補者は基本的に以下のように決定します。なるべく執筆希望者を優先しますが、編集委員会において会員の先生方の専門や経歴のほか、最近の寄稿状況を把握し検討したうえで執筆候補者を絞り込み、改めて執筆を依頼します。

● すべての投稿先は、isyap-nec@googlegroups.com（日本青年心理学会 広報・ニューズレター編集委員会）です。

● 原稿の字数は 800 字程度を原則としますが、電子版なので柔軟に対応いたします。

● 第 79 号の特集テーマは「**地域と青年**」です。地域固有の文化・伝統や地域における新たな取り組みと青年など、「地域と青年」について自由に論じていただけましたら幸いです。生まれ育った地域ではない地域で大学時代を過ごしたり、就職にともなって引っ越してその地域と青年の在り方にカルチャーショックを受けたり、昔を振り返ってご自身の出身地での体験など、さまざまな視点からのご寄稿をお待ちしております。④の「特集テーマ投稿希望」でご応募ください。

事務局からのお知らせ

I. 大会のお知らせ

今年度の大会は年末の開催となります。早めに予定を調整の上、多数のご発表・ご参加をお待ちしております。7 月中旬に第 1 号通信をお届けします。Web サイトでも随時、情報を発信していきます。

日本青年心理学会第 27 回大会

会期：2019 年 12 月 21 日（土）・22 日（日）

会場：東京工芸大学 中野キャンパス

〒164-8678 東京都中野区本町 2-9-5

地下鉄／東京メトロ丸ノ内線・都営地下鉄大江戸線

－中野坂上駅下車 徒歩約 7 分

<https://www.t-kougei.ac.jp/access/#nakano>

Ⅱ. Web サイト移転のお知らせ

Web サイトの保守管理契約の終了にともない、セキュリティを強化し、より使いやすい Web サイトにリニューアルしました。6 月末日をもって従来の Web サイトにはアクセスすることができなくなります。7 月 1 日からは、以下の新 Web サイトより最新情報をご覧ください。

<https://www.jsyap.org>

Ⅲ. 学会メーリングリストをご利用ください

現在、電子版ニューズレターや大会・研究会などの案内を、学会メーリングリストによって配信しています。会員であれば、青年心理学に関する研究会や講演会・シンポジウムなどの案内を、このメーリングリストを用いておこなうことができます。セキュリティの関係上、事務局からのみの発信となりますが、どうぞご利用ください。

日本青年心理学会事務局

The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology

E-mail : seinenshinri@gmail.com

新 Website : <https://www.jsyap.org>

振替口座 : 00940-6-273417

口座名称 : 日本青年心理学会

お問合せはできるだけ E-mail でお願いいたします。